ゴール型ボールゲームにおける学習内容に関する検討
―学習指導要領とTGfUを中心に―

池内　良平

A study of the learning content in goal type ball games
―Focused on the Course of Study and TGfU―

Ryohei IKEUCHI

Ⅰ．研究の動機と目的

2008年3月に学習指導要領が改訂され，体育の分野においては，小学校，中学校，高等学校の接続の視点，指導内容を系統的，段階的に明確に示すこと，指導内容の確実な定着を図ることに向けた改善が示されている．

近年，学校教育界においてもアカウンタビリティ（説明責任）が問われている．体育科においても例外ではなく，体育で何を教えるのかという，学習内容に対する議論が繰り返されている．このような状況に対し，「健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会」の審議において，アカウンタビリティにどう応えるかが課題となり，学習内容の「ミニマム」が検討された．「ミニマム」とは12年間の教育の成果として「すべての子どもたちが身に付けておくべきもの」である．

このことを踏まえ，2008年学習指導要領では，各運動領域において身に付けさせたい具体的な内容が明確に示された．領域には，器械運動や水泳のように，個人的技能の習熟を中心としたものと，ボールゲーム（本稿ではゲーム，ボール運動，球技の総称として用いる）などのように，技能の発揮を中心としたものがある[1)]．

技能の発揮を中心とする，ボールゲーム領域においても「何を学ばせるのか」という学習内容の構造が厳しく問われた．国際的に球技教材について論議されるようになり，「ボールを持たないときの動き（作戦）」の類似性に着目してボールゲームを分類する方法が支持されるようになった．

日本においても2008年学習指導要領では，学習内容の共通性を重視し，3類型で示すことになり，それぞれの学習内容は，「ボールを持たないときの動き」と「ボールを操作する技能」の2側面からとらえられた[2)]．

他方で，諸外国ではボールゲームにおける授業論が発展しており，「戦術学習」論が議論の焦点となりつつある．代表的なものとしては，イギリスのTGfU（Teaching Games for Understanding）や戦術アプローチなどが挙げられる．

日本でも，ゴール型ボールゲームにおける学習内容やカリキュラム構成について様々な研究，実践が行われてきた．しかし，授業実践やカリキュラム構成と学習指導要領解説（以下，解説）を比較したものは少なく，実践研究と解説における学習内容とのズレについては検討されていない．そこで本研究では，現場での実践が2008年学習指導要領の主旨を反映しているかどうかを検討する．また，ゴール型ボールゲームの学習内容の系統性について検討し，1つのモデルを試案として提案する．

Ⅱ．研究方法

本研究では，実践レベルでの学習内容の系統性を明らかにするため，主に文献資料を基に論議していく．

初めに，2008年の解説を基に，各学年におけるゴール型ボールゲームの目標及び内容をまとめる．そして，ゴール型ボールゲームの学習内容の系統性を「技能」「態度」「思考・判断」の分類から明らかにする．

次に，2008年学習指導要領では何が重視されているのかを考察するため，2008年解説と1998年解説とを比較する．

さらに，ゴール型ボールゲームの実践研究の動

向をまとめ，実践レベルでのゴール型ボールゲームの学習内容の系統性を明らかにしていく．対象データは，戦後から現在まで続いている唯一の体育専門誌として大修館書店から刊行されている「体育科教育」に掲載されたゴール型ボールゲームの教材を選択した．対象期間は，1998年学習指導要領が告示され実施されるまでの1998年から2002年までと，2008年学習指導要領が告示され実施されるまでの2008年から2012年までとし，実践レベルでの学習内容の変化を明らかにしていく．

また，諸外国におけるボールゲームカリキュラムの特徴として，TGfUにおける学習内容や戦術アプローチにおける学習内容を明らかにする．

そして，実践研究の成果と2008年解説での学習内容の系統性を比較することで，2008年学習指導要領から見た，実践研究の検討を行う．

最後に，まとめとして，今までの論議から明らかにされたことを基に，現場での実践が2008年学習指導要領の主旨を反映しているかどうかを検討していく．また，ゴール型ボールゲームの系統性について検討し，1つのモデル提案を行う．

Ⅲ．結果・考察

1. ゴール型ボールゲームにおける目標と内容

2008年解説における目標と内容において，目標に関して，小学校1～4年生では運動を「楽しく行う」ことが示されている．そして，5・6年生で「喜び」が付け加えられ，中学校以降では「勝敗を競う」が付け加え示されている．また，「技能」に関しては，小学校1・2年生で「簡単なボール操作」と示されている．そして学年が上がるごとに，「基本的なボール操作」，「ボール操作」，「安定したボール操作」，「状況に応じたボール操作」というように示されている．

以上のようなことから，目標と内容は段階的，系統的に示されていることが明らかになった．

2. ゴール型ボールゲームにおける系統性

2008年解説におけるゴール型ボールゲームの内容を学年ごとにみることで，解説に示されている学習内容の系統性を明らかにした．

「技能」においては，「ボール操作」と「ボールを持たないときの動き」の双方において，同じ目的の基，段階的に系統性をもって示されていることが明らかになった．具体的には以下のように段階的，系統的に示されていた．

表1：ゴール型における技能の系統性のまとめ

学年	小学校			中学校		高校
	1・2年	3・4年	5・6年	1・2年	3年・入学年次	その次の年次以降
求められるプレイ	基礎的なボール操作と動き	味方を意識	守備者を意識	ゴールを意識	次のプレイを意識	味方や相手の動きを意識

「態度」や「知識，思考・判断」においては，段階的・系統的に明確に示されているとは言えなかった．これは，「技能」のような習熟・向上の形態とはことなるため，段階的，系統的に明確に示すことが困難であるためだと考えられる．

3. 2008年と1998年の解説の比較

小学校においては，双方で目的としている内容が異なっていた．1998年解説では，楽しさを味わうことと，そのために必要なパスやドリブルなどの技術を取得することを目的としていた．それに対し2008年解説では，楽しむことを通して動きを獲得することを目的としていた．パスやドリブルなどは，動きの獲得のための1つの手段として示されていた．

以上のようなことから，2008年解説は「ボール操作」よりも「ボールを持たないときの動き」を重視していることが明らかになった．

4. 実践研究の動向

1998年学習指導要領下での実践では，ドリブルシュート，センタリングといった具体的な技術や，サイド攻撃，中央突破といった具体的な戦術を行うことが目指されていた．

2008年学習指導要領下での実践では，空間の創出，利用といった，動きに関することや，プレイの選択といった状況判断に関すること，そして，これらを利用し作戦を立てて実行することが目指されていた．

5. 実践研究の成果と学習内容の関係

2008年学習指導要領から見た実践研究を検討した．

小学校低学年において実践で行われている内容は，解説で示されている内容と一致しており，概

ね段階通りだと言えた．そして，小学校低学年であっても，攻撃のみに限定するなど，求める内容を制限することで，当該学年において解説で示された内容以上のことも，十分身につけることは可能であるということが明らかになった．

小学校中学年において実践で行われている内容は，当該学年よりも上の学年の解説に示してある内容のものが多くあった．このことから，中学年においても，その上の段階で示されている，シュートを目指す動きや，スペースを利用することも可能であるということが明らかになった．

小学校高学年において実践で行われている内容は，中学年と同様に，当該学年よりも上の学年で示されている内容が多く，高学年においても，スペースの創出や利用などの高度な動きを身につけることが可能であるということが明らかになった．

以上のようなことから，解説に示されている内容以上のことも，子どもたちは身に付けることが可能であるということが明らかになった．

6. 諸外国のボールゲームにおける特徴

【TGfUの特徴】

戦術的気づきを重視しており，「何をするのか」「どのようにするのか」を子ども自身が考えることを求めている．そして自ら動作の練習課題を設定し，解決することで，身につけた能力をゲームに活かすことを目指している．また，戦術的気づきによる発展様相を段階的に示している．ここでは，攻撃と守備が相互に発展していくことにより，ゲームを段階的に発展させていることがわかる．

【戦術アプローチの特徴】

TGfUと同様に戦術的気づきを重視している．戦術的気づきと技能の発揮とを結びつけることで，子どものゲームパフォーマンス（「ボール操作の技能」＋「ボールを持たないときの動き」）を向上させることを目指している．また，戦術アプローチでは，子どもの発達段階に，戦術的な複雑さのレベルを対応させることも重視している．ここでも，攻撃と守備が相互に発展していくことから，ゲームを段階的に発展させていることがわかる．

Ⅳ．結論

本研究では，現場での実践が2008年学習指導要領の主旨を反映しているかどうかを検討した．

2008年学習指導要領では，系統性を重視し学習内容が構成されていた．しかし，解説での系統的な内容は，身体的な発達段階ではなく，ゲーム様相の発達段階である．

また，実践で行われている内容は，解説において当該学年よりも上の学年で示されている内容が多く，学年の区分を超えて身につけることが可能であった．このことから学年ごとに区分されることによって，子どもたちの，戦術的気づきのための豊かな発想力を生じる機会を，閉ざしてしまう可能性がうかがえる．

これらのことを踏まえると，学習指導要領でのボールゲームでは学校種や学年による区分を取払い，戦術の発展プロセスであるゲーム様相の段階分けのみにすることで，より子どもの実態に合わせた指導ができるようになり，子どもの成長の可能性を広げることができるのではないだろうか．実際に諸外国で行われているTGfUや戦術アプローチでは学年などの区分はなく，ゲーム様相の段階分けのみにとどまっている．

以上のようなことを踏まえ，1つの試案として，表2のような，ゴール型ボールゲームの学習内容の系統性についてのモデルを提案する．

表2：戦術の発展プロセスに基づく学習内容

段階		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
OF	気づき	ボールキープ	突破	相手の盾を崩す	攻撃の幅を作る	シュートスペースを作る	組織的な攻撃
	具体的内容	・コントロールする ・ボールと相手の間に自分の体を入れる ・つなぐパス ・パスを受ける	・フェイント ・ドリブル ・前方へのパス	・ロングパス ・ボールを受けるときの体の向き ・相手の背後を狙う動き ・裏へのパス ・攻めるパス	・サポート ・サイドのスペースの利用 ・サイドからのセンタリング	・ポストプレイ ・ディフェンスを引きつけてゴール前のスペースつくり ・作ったスペースへ飛び込む	・相手に応じた攻め方の選択（サイド攻撃，中央突破，カウンターなど） ・フォーメーションやシステムの利用
DF	気づき	ボールを奪う	人を追いかける	PFを奪える（ゴール守る）	チャレンジ＆カバー	組織的な守備
	具体的内容	・ボールを追いかける ・インターセプト	・人を追いかける ・マーク	・ゴールとボール保持者を結んだライン上に立つ ・ゴール前のスペースを守る ・前方へのパス，前方への動きを防ぐ	・チャレンジ ・タックル ・インターセプト ・ディレイ ・カバーリング	・味方と連携したプレス ・プレスに対応したカバーリング ・マンツーマンディフェンス ・ワンサイドカット ・ゾーンディフェンス ・相手の攻め方に応じた守り方

主な文献

1）文部科学省：小学校学習指導要領解説　体育編，2008

2）高橋健夫：球技の授業．中学保健体育科ニュース，No.1：2－5，大修館書店，2009

（指導教員　森勇示）